

種苗をめぐる情勢

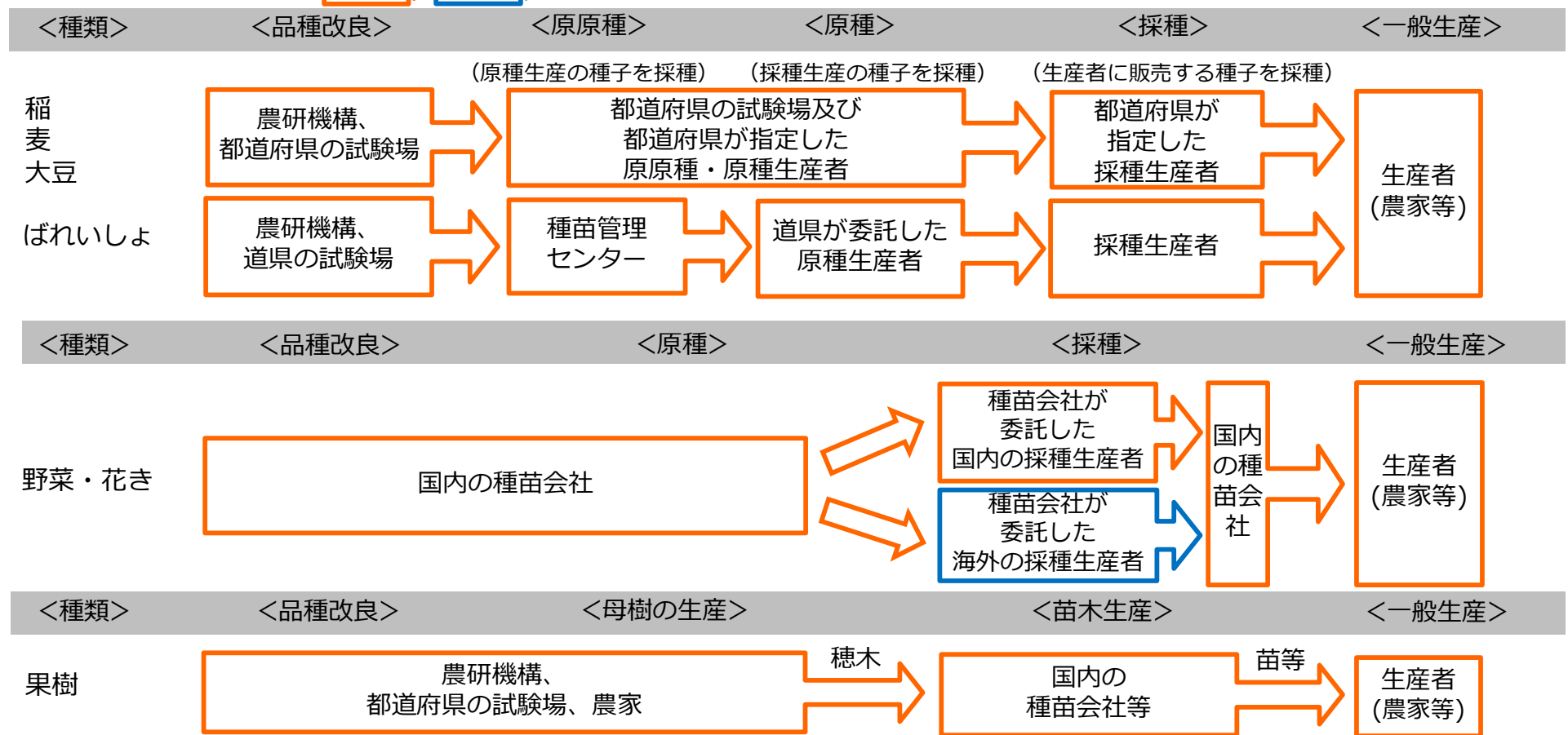
令和8年9月

農林水産省知的財産課

我が国における種苗の供給体制

- ・ 稲、麦、大豆、ばれいしょ等の主要農作物の種子は、農研機構や都道府県の試験場が開発した優良な品種の原原種を元にして国内の種苗生産地で段階的に増殖され、供給されている。
- ・ 野菜・花きの種子は、国内の種苗会社が開発した優良な品種を用いて国内及び海外の生産地で増殖され、供給されている。
- ・ 果樹の苗は、農研機構や都道府県の試験場等が開発した優良な品種の母樹の穂木（枝）を国内で他の品種（台木）に接いで増殖し苗木に仕立てられ、供給されている。

【種子供給の代表的な例】 国内 → 海外



我が国における種苗の需給動向

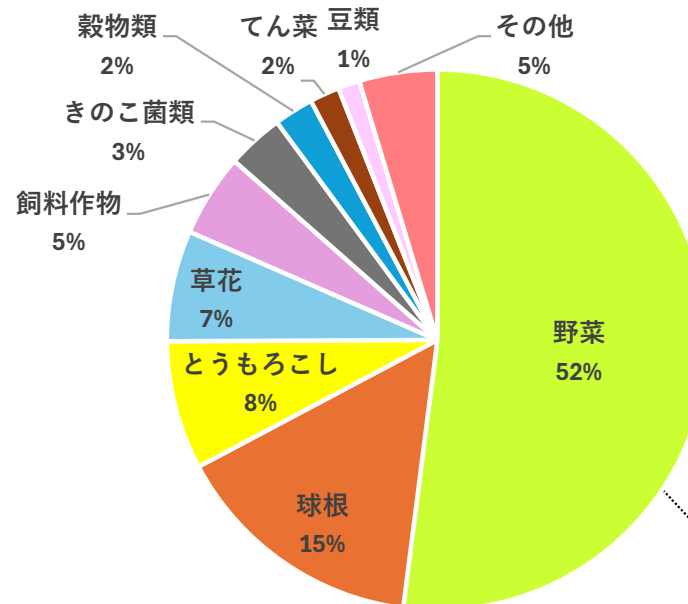
- 我が国の種苗産業の市場規模は、2,600億円程度と推計される。
- 穀類、果樹の種苗は、ほぼ全量国内で生産されている。
- 野菜種子については、国内流通の約9割が国外で生産されているが、これは日本の種苗会社が、種子生産に適した北・南半球の複数国でリスク分散して生産を行っていることによるもの。加えて、国内で約1年分の在庫を保有するなどにより、安定供給が確保されている。

我が国の種苗販売市場規模

品目	販売額（億円）
穀 物	311.8
果 樹	266.5
野 菜	1,689.8
花 き	300.3
合計	2,568.4

（資料：JATAFF「令和2年度種苗産業動向調査」）

我が国における種苗の輸入額（2025年）



野菜種子の輸入元国

国名	輸入額 （百万円）	数量 （トン）
チリ	9,168	627
南アフリカ共和国	3,830	254
アメリカ合衆国	2,546	975
中華人民共和国	2,184	350
イタリア	2,167	577
ペルー	955	4
デンマーク	911	640
ニュージーランド	907	352
タイ	715	46
オーストラリア	588	90
その他	3,112	195
合計	27,082	4,110

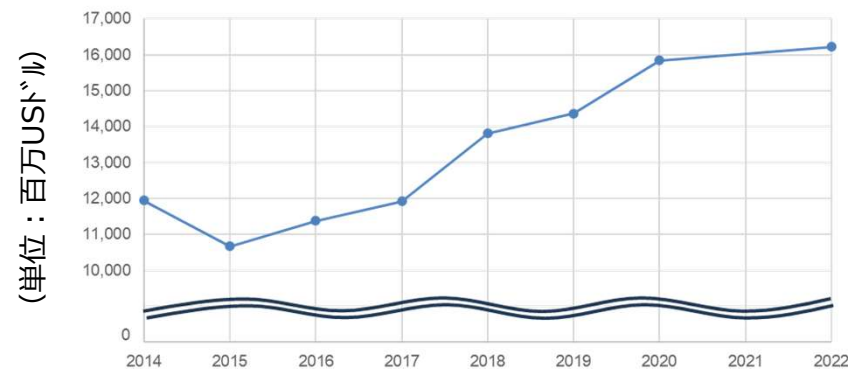
（注）数値については、四捨五入のため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

（資料：財務省「貿易統計」を基に作成）

世界の種苗貿易と産業規模

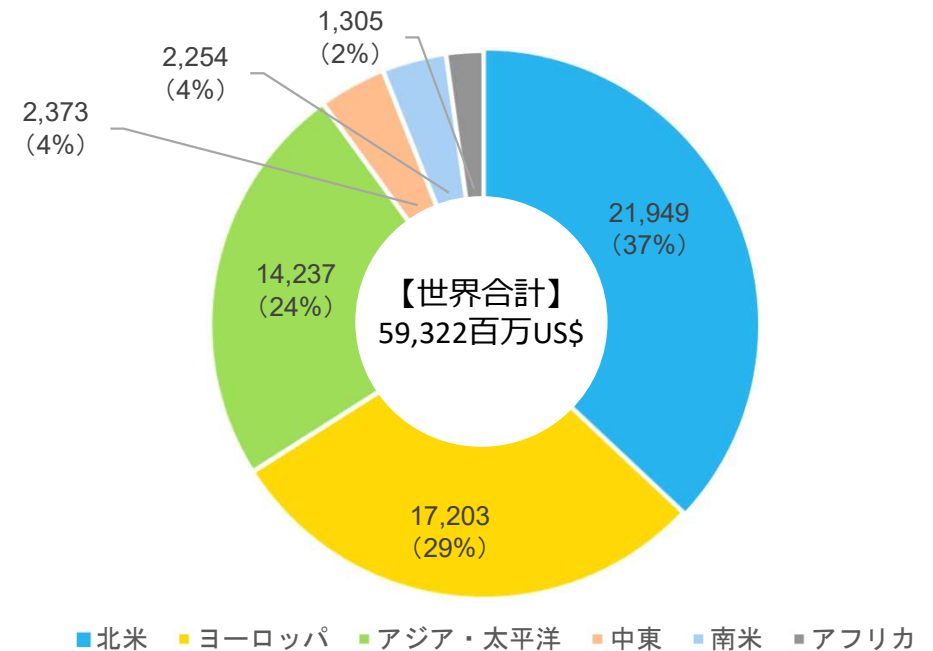
- 世界の種苗の貿易額は、増加傾向で推移。2022年（令和4年）の輸出額は約162億USドル（約2兆666億円）となっている。
- 世界の種苗の市場規模は、約593億USドル程度と推計されている。

（1）世界の種苗の輸出額の推移



※2018年から種イモ・木の種が追加。
2018年輸出：(種イモ)935百万USドル、(木の種)19百万USドル
(資料：国際種子連盟 (ISF) 「Seed Exports」を基に作成)

（2）世界の種苗市場規模（2025年）



(資料：JATAFF「令和7年度種苗産業動向調査」)

（3）国別種苗の貿易額(2022年)

(単位：百万USドル)

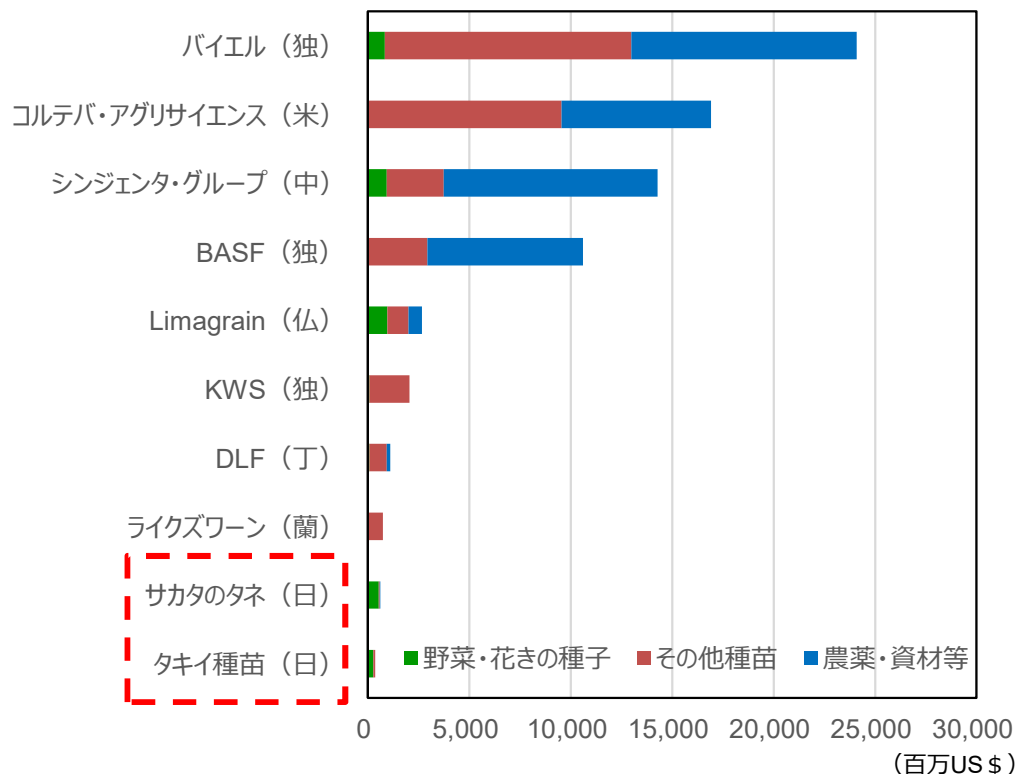
輸出額			輸入額		
国名	うち野菜		国名	うち野菜	
1 オランダ	3,162	2,202	1 オランダ	1,264	555
2 フランス	2,565	555	2 アメリカ合衆国	1,161	362
3 アメリカ合衆国	1,965	547	3 ドイツ	984	112
4 ドイツ	1,123	78	4 フランス	946	235
5 デンマーク	540	50	5 イタリア	847	238
6 イタリア	509	153	6 スペイン	721	321
7 ハンガリー	482	9	7 ベルギー	626	32
8 ポーランド	450	18	8 中国	530	273
9 ルーマニア	446	3	9 メキシコ	454	330
10 オーストリア	410	10	10 ルーマニア	397	29
.....					
26 日本	136	60	16 日本	271	132
その他	4,443	1,278	その他	6,285	1,813
総計	16,230	4,963	総計	14,484	4,432

(資料：国際種子連盟 (ISF) 「Seed Exports 2022」, 「Seed Imports 2022」を基に作成)

世界の主要な種苗会社の概要

- 世界の主要な種苗会社の種苗売上高をみると、バイエル（独）、コルテバアグリサイエンス（米）、シンジェンタ（中）等が上位を占めており、我が国からは、サカタのタネ及びタキイ種苗が世界上位10社に入っている。
- 両社は、多くの国に展開しているグローバル企業で野菜種子においては上位を占めており、特に、サカタのタネはブロッコリーで高い世界シェア、タキイ種苗はメキシコにおいてカボチャで高いシェアを有している。
- 国内市場の拡大が見込めない一方、種苗の国際競争の激化が見込まれており、我が国種苗会社のさらなる輸出拡大や海外展開が重要。

世界の主要な種苗会社の種苗等売上高（2025年）



（資料：JATAFF「令和7年度種苗産業動向調査」。Limagrainは、同社HPから作成。
なお、ビルモランについては、2023年のLimagrainによる株式公開買付けの結果、
上場廃止となった。）

野菜種子及び花き種子の主要会社のシェア(2020年)

	販売額 (百万US\$)	シェア (%)
ビルモラン（当時）	780	10.3
バイエル	729	9.6
シンジェンタ	653	8.6
ライクズワーン	527	7.0
BASF	511	6.7
タキイ種苗	458	6.0
サカタのタネ	379	5.0
Enza	373	4.9
Bajo	250	3.3
East-West	168	2.2
KWS	61	0.8
その他	2684	35.4
総計	7573	100

（資料：JATAFF「令和5年度種苗産業動向調査」）

我が国の種苗会社の海外展開事例

サカタのタネ

- ・ブロッコリーの65%、トルコギキョウの80%の世界シェア

タキイ種苗

- ・カボチャのメキシコでのシェア90%、ハボタンの世界シェア約40～50%

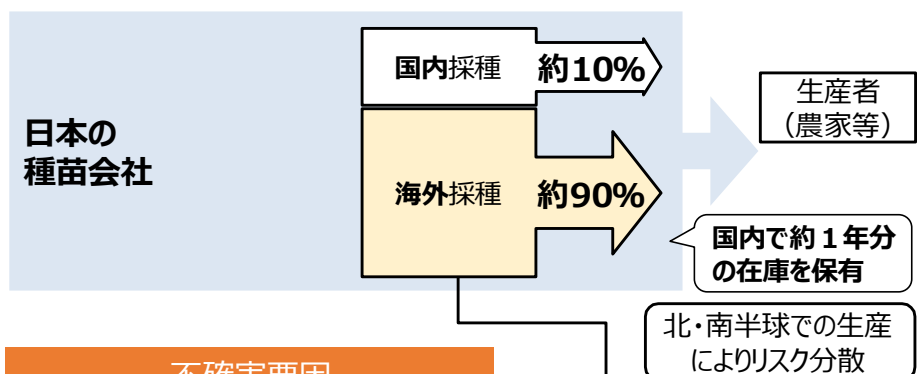
（資料：サカタのタネは会社HP、タキイ種苗は聞き取りを基に作成） 4

(参考) 野菜種子の安定供給に向けて

- **野菜種子**は、良質な種子を安定的に供給するため、日本の種苗会社が日本向けの品種を国内で開発し、**約1割を国内で生産**するとともに、リスク分散の観点から、**約9割を種子生産に適した北半球・南半球の世界各地で生産**。
- 近年の気候変動等により採種適地が変化する中で、より安定的な野菜種子の供給体制を築くため、**国内外における新たな採種地の開拓**とともに、国内の採種農家の高齢化等を踏まえた**採種技術の効率化**等を推進。

我が国の野菜種子の供給体制

<品種開発> <原種> <採種> <一般生産>



不確定要因

- <国内>**
 - ・採種農家の高齢化
- <海外>**
 - ・気候変動（温暖化等）、病害虫の発生による採種適地変化
 - ・食料生産との競合
 - ・好条件採種地を巡る競争激化
 - ・採種国の人件費の上昇
 - ・生産コスト・物流費の上昇

国・地域	R7輸入量 (t)
アメリカ合衆国	975
デンマーク	640
チリ	627
イタリア	577
ニュージーランド	352
中華人民共和国	350
南アフリカ共和国	254
オーストラリア	90
インド	48
タイ	46
大韓民国	25
フランス	24
その他	103
計	4,110

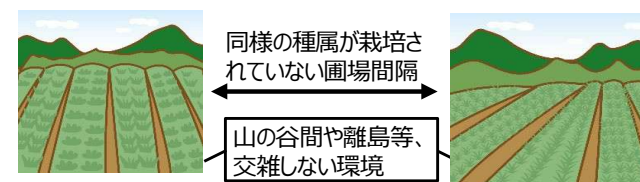
注) 果樹及び主要作物（稲、麦類、大豆）の種苗は、ほぼ100%国内生産・供給されている。

資料：財務省「貿易統計（2025年）」を基に作成

食料安保の観点から供給構造をより強靱化

国内外における新たな採種適地の開拓

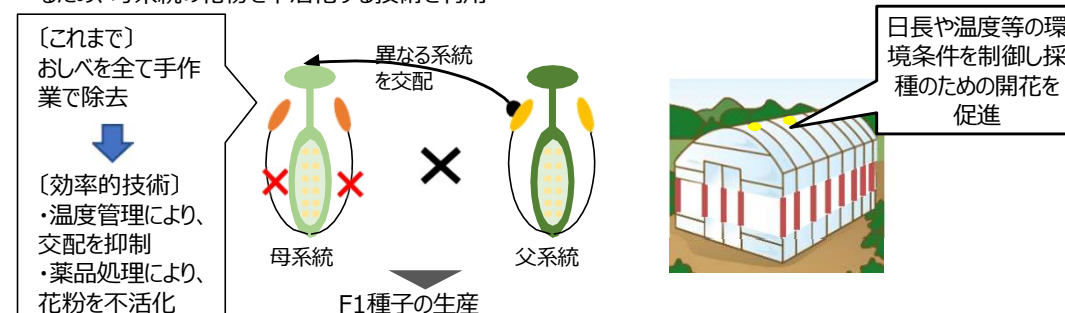
- 気候変動等の影響により、採種適地が移動。新たな採種適地（乾燥した気候や他品種と交雑防止が確保できる山間地や離島）の開拓を進めていく必要。



国内の効率的な採種の推進

- 野菜の採種には通常、青果物生産と異なり手間と時間を要する。国内の採種農家の高齢化が進む中、効率的な採種に向けた技術の導入を進めていく必要。

- ・効率的な交配技術
異なる系統を交配して得るF1種子を効率的に生産するため、母系統の花粉を不活化する技術を利用
- ・環境を自動制御した効率的な採種



国内を含む世界各地における種子生産基盤を維持・強化し、適地適作とリスク分散を確保した生産・供給構造を強靱化